

私が選んだこの5冊

# 幸せになるほどの、 読みごたえ

著者 渡邊十絲子

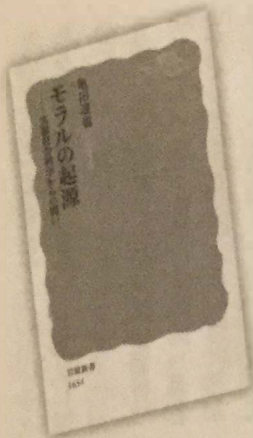
## 新しい視野が開かれた1冊

二〇一七年も六〇冊ほどの新書を読み、たくさん書評を書いた。とくに印象深かった五点を、以下に紹介します。

人文系の学部・学科の存在理由が

点を知れば、ヒトの独自性も見えてくる。著者の目的は「人文社会系の学問が（中略）個々の問題に対してマニユアル的な「答え」を与えるのではなく、より原理的なレベルでの「解」を与える可能性」を描いてみせること。頼もしい。

科学技術分野からはこの本。岡田美智男「（弱いロボット）の思考」は、ロボットの持つ可能性を意外な方向から論じる。この本に出ているロボットは、人間の能力をコピーしたもので、人間をしのぐ能力を発揮するものでもない。むしろ弱くて



## 私の選んだベスト 5

- 1位 「モラルの起源」 著◎亀田達也 岩波新書
- 2位 「（弱いロボット）の思考」 著◎岡田美智男 講談社現代新書
- 3位 「時間の言語学」 著◎瀬戸賢一 ちくま新書
- 4位 「60歳からの外国語修行」 著◎青山 南 岩波新書
- 5位 「中学生棋士」 著◎谷川浩司 角川新書

限定的な能力しかもたない（だから人間の雇用を圧迫しない）。人間の能力を引き出すための弱いロボットという発想がすばらしい。ロボットが未来の希望の象徴だった昭和中期に子ども時代を送った者として、ロボットに明るいイメージをもちつづけたいのだ。

瀬戸賢一「時間の言語学」は、時

間というところのないものに、

人間は家族や群れなどの「仲間うち」を超え、その外側の人たちと平和共存できるかどうかを、文理横断的手法で考える。対立を超えて生きるための、遅効性の良薬だと思う。社会性や利他性、共感などのルーツを探るうえで、ヒトとサルとの共通

### わたなべとしこ

1964年東京都生まれ。早稲田大学文学部在学中、鈴木志郎康ゼミで詩を書き始める。卒業制作の詩集で小野梓記念芸術賞受賞。著書に詩集「Fの残響」のほか、書評集「新書七十五番勝負」、新書「今を生きるための現代詩」など。

間というところのないものに、リアルで具体的な手触りを与える。時間はもともと抽象なので、われわれは時間を比喩的にとらえ、表現する。しかし人間は、時間の実感を空間的にしか表現できない（「昨年を振り返る」とか「締切が迫ってきた」など）。すると、時間というものを把握しようとしているのに、なぜか空間的な把握にとらわれてしまう。この分析も見ものだが、この本のもうひとつの企みは、われわれが無意識に信奉している「時は金なり」というメタファーを解体することである。絶対に解体したほうがいい、という著者の信念がカッコイイ。おなじ環境に生きていても、意識が変われば見える風景はがらりと変わる。そんな驚きと新鮮な人生を提供する労作だ。

以上三点は、新しい視野をひらく